文科省オープン・リサーチ・センター整備事業

「イノヴェーション・クラスター形成に向けた川崎都市政策への提言」プロジェクト

▲　活発に意見が出されたパネルディスカッション

百貨店に焦点当て 川崎の街づくり検証

ポスト・ラゾーナの都市像を探る

文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業選定の「イノヴェーション・クラスター形成に向けた川崎都市政策への提言」プロジェクト（社会知性開発研究センター／都市政策研究センター、代表＝平尾光司経済学部教授）のシンポジウムが9月13日、川崎市産業振興会館で開催された。「川崎の街づくり―ポスト・ラゾーナの都市像を探る」をテーマに講演とパネルディスカッションを展開。百貨店に焦点を当て、川崎の街づくりの検証を行った。この模様は神田、生田両キャンパスにも同時中継され、計198人が聴講した。

はじめに関根孝商学部教授が「百貨店と街づくり」と題して講演。百貨店の意義として「都市文化の発信」を挙げ、ロンドンのハロッズなど世界の都市を代表する店舗を例示。業績不振を打破するためにはマーチャンダイジング力の向上、若者向け商品の拡充のほか、文化的イベントの開催といった街づくりで担う部分もあると論じた。

㈱さいか屋代表取締役社長の岡本康英氏は「川崎における百貨店のビジネスチャンス」をテーマに講演。西武百貨店の出店・撤退、ラゾーナのオープンといった商業環境の変化を解説し、地域密着を意図した同社の経営戦略を紹介した。

次に韓国・ロッテ流通産業研究所長の白寅秀氏が「ロッテ百貨店の街づくりマーケティング」と題し、韓国における街と百貨店の協力例を紹介。仁川・松島新都市、釜山などで進められている行政と百貨店との連携による街づくりを詳報した。

川崎市産業振興財団理事長の君嶋武胤氏は「イノベーション都市川崎・都心部の活性化をどう進めるか」と題し、魅力ある街を目指した提言を行った。駅周辺の総合整備事業について触れ、放置自転車対策、東西地区を結ぶ自由通路の整備などの取り組みを説明した。

パネルディスカッションには4氏に加え、徳田賢二経済学部教授がコーディネーターとして参加。ラゾーナ川崎完成後の発展の可能性、方向性を探った。「川崎の場合、多摩川を中心とした自然の活用や若い世代を意識した街づくり、商業集積形成が必要である」などが提言された。

川崎市の都市・産業政策の再構築をめざした具体策の提言を目的に04年度からスタートしたプロジェクトは「川崎都市白書」を市に提出するなど、活発な活動を行い、今年度が最終年度。09年1月10日には同会場で、総仕上げの一環として国際シンポジウム「地域イノベーションの5つのモデル」を開催する。

社会科学研究所 緊急公開討論会

生田キャンパスから発信

「アメリカ発金融危機の影響　同時代・現場からのレポート」

米国発の金融・経済危機が世界に広がり、実体経済への悪影響が日増しに深刻になる中、今後の日本経済、世界経済はどうなっていくのか。社会科学研究所（所長＝内田弘経済学部教授）の緊急公開討論会「アメリカ発金融危機の影響　同時代・現場からのレポート」が10月22日、生田キャンパスで行われた＝写真。

基調講演で、9月中旬から下旬にかけて米国を訪れた平尾光司教授が、今回の危機の発端となった投資銀行を中心とした米国の住宅金融システムや米国・欧州における金融危機対策の展開を説明。当面の金融危機の克服には、国際協調による危機対策の総動員が必要であり、今後は米国中心の国際経済システムが転換し、かつて金融危機克服を経験した日本への期待が高まり、銀行などの金融機関経営の規律強化、公共性に対する認識の強化が起こるであろうと語った。

平尾教授の報告を受け、西岡幸一教授は「スターバックスの店舗と人間・地価の動きには連動があり、近年のアメリカ経済には、グリード（欲）がトラスト（信頼）を超える局面があった」と指摘。田中隆之教授は、かつての日本の金融危機との違いを挙げながら、「プルーデンス政策の重要性とともに、非銀行救済の理屈をどう立てるのか」と冷静に論じた。野口旭教授はそもそもの原因とされるアメリカの過剰流動性や国際的なインバランスといった見方を否定し、「アメリカ型の投資銀行のビジネス・モデルが行き詰まったものだ」などと語り、激しい論戦が繰り広げられた。

最後にコーディネーターの原田博夫教授は「理論的に正しい政策であっても議会、市民に受け入れられる説得力ある解決策でなければならない。生田キャンパスから、この時代の危機に対する政策課題と英知を発信できた」と締めくくった。

（討論会の内容は、12月発行予定の社会科学研究所月報に掲載）。

2氏に博士の学位を授与

福島　良治氏

山口　勝業氏

専修大学から10月18日付で次の2氏に博士の学位が授与された。授与式は同日、神田キャンパスで行われた（氏名に続き、学位の種類・学位請求論文名）。

・福島　良治氏　博士（経済学）「アクティブ・デリバティブ戦略」

・山口　勝業氏　博士（経済学）「日本経済のリスク・プレミアム」

文学部公開講座「こころとおもひ」

◆夏目漱石の小説
◆職人の心の伝承
◆兵士たちの心情

第42回文学部公開講座「こころとおもひ」が10月18日、生田キャンパスで開催され、市民ら約100人が熱心に聴講した。

荒木敏夫副学長のあいさつの後、柴田弘捷教授の司会で進められ、まず小野隆教授（近現代文学）が登壇。テーマは「漱石の小説『こゝろ』―内と外から先生の『心』を見る―」。高校の教材に採用され、いわば国民的小説である夏目漱石の長編『こゝろ』。講演では同作品を外側から描いた「上・先生と私」と「中・両親と私」、内側から描いた「下・先生の遺書」をそれぞれ図式によって分析、作品の登場人物の行動や心の動きを検証した。

▲　講演する小野隆教授

続いての樋口博美准教授（職業社会学）のテーマは「伝統産業に生きる技と職人の心の伝承―加賀と京都の伝統と今―」。職人とは何であるのか。職人と芸術家、作家との違いは何か。その技能が産地形成のカナメとしてどう受け継がれたか。職人の技と心がどのように維持されているのか―を、映像を使いながら加賀の友禅染や京都の扇子つくりを例にあげ探った。

新井勝紘教授

樋口博美准教授

最後は新井勝紘教授（日本近代史・民衆史）の「農民兵士と学徒兵の心中をさぐる―軍事郵便・遺書などの紙背を読み取る」。戦場に赴いた兵士が家族や友人にあてた軍事郵便を研究し、その解読をゼミで学生に指導している同教授は、「兵士からの手紙は内容が私的であり、検閲があるため戦史資料になりにくいと思われてきた。しかし、丹念に読み込むことでさまざまな発見がある。戦地の様子をリアルタイムで描写するものや、本人の心情や銃後を守る家族への気遣いが伝わってくるものもある。国家や軍隊の視点ではない、若い一兵士の心情から戦争を考える貴重な資料だ」と語り、会場から多くの質問が寄せられた。

文化財保護

卒業生が語る 熱き闘いの軌跡

文学部主催「発想転換～卒業生による文化財保護への熱き闘い」が10月10日、生田キャンパスで開かれた。

歴史的文化遺産の破壊と闘い、あるときには世論と対立しながらもあるべき姿を実現するため、組織の枠を越えて文化財を保護する活動をしている卒業生の熱き思いや成功と挫折の軌跡などが語られ、学芸員課程を履修する学生を中心に約260人が熱心に聴き入った。

福田健司さん

菊田徹さん

若林篤男さん

【講演者とテーマ】福田健司さん（昭46文＝元東京都教育委員会・国際文化財顧問）「埋蔵文化財行政の変遷と今後の課題」▽菊田徹さん（昭47文＝大分県臼杵市教育委員会次長）「国宝及び特別史跡・臼杵磨崖仏保存事業の経過」▽若林篤男さん（平14院文修＝新潟県佐渡市教育委員会、世界遺産・文化振興課主事）「佐渡金銀山、世界遺産登録への道」

専修人の新しい本

米国の大統領と国政選挙
［増補］「リベラル」と「コンサヴァティブ」の対立

藤本一美・濵賀祐子著

米国の大統領選挙は、現代世界における政治・経済・外交・軍事力の圧倒的優勢体制と相まって、影響力の大きさ故に、その行方は、米国のみならず、世界各国の注目の的となっている。

2004年刊行の第1版は、第二次世界大戦以降の米国における大統領選挙および中間選挙をとりあげ、米国が直面してきた諸問題の争点を提示し、「リベラル」と「コンサヴァティブ」の対立の視点から、米国政治のダイナミクスを概観しようとした。

増補版は2004年の大統領選挙と2006年の中間選挙の背景、結果及び解説を加えた。（専大出版局・本体2400円＋税）

著者（ふじもと・かずみ）＝法学部教授。担当は政治学の基礎ほか。（はまが・ゆうこ）＝法学部非常勤講師。担当は政治学A。

講座情報

◇文学部公開シンポジウム「王朝文学と宮中行事」

文学部と鶴岡八幡宮の共催で、源氏物語千年紀に際して源氏物語及び王朝文学研究の第一人者を招き、公開シンポジウムを開催する。定員150人。12月1日締め切り。

▽日時＝12月16日（火）13時～16時30分・御神楽奏楽は17時30分～18時30分▽会場＝鎌倉・鶴岡八幡宮直会殿▽講師及びテーマ＝日向一雅明治大学教授「源氏物語と宮中行事」、廣田収同志社大学教授「説話文学と宮中行事」、河添房江東京学芸大学教授「唐物と宮中行事」、小山利彦本学文学部教授「王朝と御神楽」

◇社会知性開発研究センター／言語文化センター国際公開講座

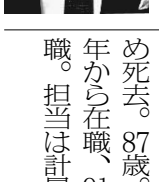
「ON PARAMETRIC SYNTAX with special reference to English and East Asian languages」

ハーバード大学のC.T. James Huang教授を迎え、生成文法理論に基づく東アジア言語の比較研究を通して、さまざまな言語現象の背後にある普遍原理とパラメター的差異を明らかにする。平田一郎文学部教授は、TP投射の内側で現れるEPP効果について講演する。定員180人。使用言語はいずれも英語。

▽日時＝12月20日（土）・21日（日）13時～17時▽会場＝神田キャンパス

＊いずれも聴講無料。詳細はホームページで。

問社会知性開発研究センター事務課☎044（911）1347


又城　一郎氏（またしろ・いちろう）名誉教授・元経営学部教授

10月2日、心不全のため死去。87歳。1961年から在職、91年定年退職。担当は計量経営学。